

環境開発論

浅田 孝著

鹿島出版会 四六判 286頁

690円

都市環境創造への方向と問題点を説く

本書は著者が20数年来、建築、都市、地域にわたる研究、計画と設計にまい進された軌跡を断片的にとりあげたもので、いわば浅田孝氏の入門書である。

本書は3部からなり、1部は論理の立脚基盤としての都市論であり、2部は多方面におよぶ実践論であり、3部に、広い意味での都市計画家は、今、今後、なにをなすべきかを思考する道標を示したものである。いずれも実に格調高い論旨と文調である。第一部で「都市や定住領域の空間構成の問題は、これまで都市計画や建築計画や造園計画という個々バラバラの専門ジャンルにまかされてきた。共同の精神も育たず、共通の言葉さえももとうとはしなかった。〈略〉そのうえ明治100年の間、政治もまた決して都市を耕やそうとはしなかった。〈略〉言葉—文字—文化系というシステムと道具—機械—エネルギー系というシステムと全然別個の二つの

系列があって、これらを平行的に適当に操作しおおせうという職能上の思いあがり、建築界や都市計画家をあやまらせてはいないだろうか？都市というような、統計学的スケールの全体環境の変革をなしとげようとするためには、〈略〉より新しい道具—時間と空間、機能と構造、数量と価値などに関する諸科学の統合一と、大衆社会状況に見合う開いた個性の職能のさまざまなチームワークの組織とを骨格に据え直さねばならない。これこそが環境創造の生成システムとなりうるに違いない」と著者の問題意識をのべている。第2部では、具体的な問題解決の方向として大都市の計画手法として、「実現不可能なマスタープランに固執することをあらため、重点的、拠点の開発を順次進め、都市全般の発展に影響をおよぼせるマスタープログラムという新しい計画技術を確立せよ」とのべる。

第3部で「都市計画は都市設計—都市の視覚論的領域の統一—に結実することを大前提としなければならぬ」といい、著者の環境創造への実践の決心をのべている。そしてこの決心の背景として、建築学会都市計画委員会を統括し、都市再開発の方法に手法、プロジェクトをもまとめ、それが大高正人の設計に

よる坂出市人工地盤計画に結実させている。

最後に第1部の都市論にもどって、いまや全面的な都市時代に入り都市全体としてのシステムと内部、部分的サブシステムを含めて変革させられていることを、好むと好まざるとにかかわらず認識しなければならない。

「もはや専門ジャンルの素朴な理論はほとんど役だたなくなった」とし、「より高次元な、有効なトータルシステムの発見こそ急務である」と。

このほか第2部で、南極越冬隊宿舎のシステム設計、世界デザイン会議事務局長、東名高速道の標識のシステム設計者であることが読みとれる。用と美、デザイン論に深い理論展開がなされている。解説に編者の川添登がこの本は浅田孝氏の数分の一も伝えることができないとのべているが、実は著者は著作から読みとれる人間でないのかもしれない。その意味で著者のあゆんだすべての道を知るなにかがほしい気がしてならない。

<A. N>

あとがき

現代の都市は、老人にとって住みやすい環境とは決していえません。しかも、老人はふえる一方です。この特集で老人問題を総合的に考えなおす契機としてほしいものです。<N>

調査季報

23

1969年11月30日

編集・発行——横浜市企画調整室

横浜市中区港町1-1

印刷——有限会社 宮村印刷所

横浜市南区永楽町2-22

